

制度の政治思想史

—— 安藤裕介『商業・専制・世論：フランス啓蒙の「政治経済学」と
統治原理の転換』（2014）を読む ——

報告者：森村敏己（一橋大学）

古城 毅（学習院大学）

討論者：安武真隆（関西大学）

安藤裕介（立教大学ほか非常勤講師）

司 会：犬塚 元（東北大学，世話人）

（1）セッションの趣旨

セッション「制度の政治思想史」は、これまで、政治思想史・社会思想史分野における注目すべき新刊を取り上げて合評会を開催して、制度の政治思想をめぐる思想的・理論的論点について共同討議をおこなってきた。本年度は、安藤裕介会員の『商業・専制・世論：フランス啓蒙の「政治経済学」と統治原理の転換』（創文社，2014）を取り上げた。

本書『商業・専制・世論』は、まずケネーやラ・リヴィエールらフィジオクラット、ついでチュルゴーとコンドルセ、最後にネッケルを詳細に分析して、「政治経済学」をめぐるフランス啓蒙の思想的展開を示している。「経済的なもの」と「政治的なもの」が絶えず交渉を繰り返して、「何度も境界線を引き直す過程のダイナミズム」こそ、本書が論証しようとするフランス啓蒙の思想史的展開である。「経済的なもの」と「政治的なもの」の関係は複雑に相互浸透しており、錯綜としていた。市場（自由な経済秩序）という対象や問題群が認識されたことは、「経済的なもの」が「政治的なもの」と分離したことを意味したのではない。つまり、著者が挑んだのは、ウォーリンやロザンヴァロンに代表される通説的な 18 世紀理解、つまりは、「経済的なもの」の勃興によって「政治的なもの」が圧倒されて衰退した、というこれまで広く受容されてきた思想史理解である。18 世紀の「政治経済学」は経済学には還元しきれず、一方では「専制」、他方では「世論」という政治学的な問題群への問いかけや、学問・科学の役割や機能をめぐる省察を含んでいた、というのである。

（2）報告者による報告

こうした成果を示した本書をめぐって、そして、本書の知見を出発点にして 18 世紀フランスにおける社会思想・政治思想の様態と変容をめぐって、本セッションでは、世代を異にする研究者が知見を交換した。セッションには登壇した 5 名のほかに 36 名が参加し、全体では 41 名が本セッションの時間と空間を共有した。

森村敏己の報告は、まず最初に、「富と徳」論争における商業社会擁護論においても経済と政治が切り離されたわけではなく、政治よりも経済が優先されたわけではない点に注意を促したうえで、本書が、穀物流通の自由化に焦点を当てることで、どのように、「富と徳」論争とは異なる「議論の位相」（本書 10 ページ）を浮き彫りにしたか、という問題提起をおこない、その観点から本書の位置づけを示した。そのうえで森村は、本書がフォーカスした「世論」という思想史的概念について、18 世紀フランス思想における多様な言説を総合的に整理して提示するというかたちで、本書に対して講評をおこなった。

すなわち森村報告は、18 世紀フランスにおいて、国王と社団の関係の束として成り立っていた絶対王政の国家像に対抗して、土地所有者、商工業者、労働者、消費者といった経済的観点から機能別に分類された集団を土台とする国家像への転換が模索されるなかで、オープンなコミュニケーションネットワークとそれに伴って形成された世論が政治的重要性をもつに至った、との歴史的整理のうえで、世論がアモルフでありだれもが世論の代弁者を自称しえた点を指摘しながら、世論をめぐる多様な言説を整理した。第一に、世論は客体としても主体としても位置づけられており、ふたつの世論観が混在していたこと、第二に、世論は明証性をもつ「単一の声」として広く観念されておりこうした理解が支配的ではあったが、他方では一部に「多声的で誤謬も含みうる世論」という理解も存在したこと、第三に、国家権力と世論の関係について、国家の機能を補完するもの、国家権力を抑制するもの、国家権力が最終的に服従すべき審級として位置づけるもの、が混在したというのである。

古城毅は、本書の議論と成果を要約したうえで、大きく分けて二つの質問を提起した。第一は社会構想の次元に関する質問であり、古城は、政治共同体内部の集団・階層の関係について、あるいは統治者階層のリクルートメントについて、各思想家がどのように考えていたかを問うた。これは、ポスト社団国家の秩序像を問うという意味で、森村報告とも親和的な指摘である。古城によれば、たとえばケネーの秩序構想においては、合理的な経済人モデルと、知識をもつことを正統化根拠とする官僚モデルとが混在しているが、両者の関係はどのように整理されていたか、というのである。関連して古城報告が第二に問うたのは、経済と宗教の関係に関わる質問であった。宗教、教会、宗教人が商業社会においてどのように位置するか、という論点をめぐって本書がとりあげた思想家たちがどのように考えていたか、どのような相違があったか、そうした相違はどのような含意をもったのか、というのである。

（3）討論者による報告・応答

以上の報告をふまえたうえで、安武真隆は、まず第一に、オイコスとポリスの関係をめぐるアリストテレスやボダンの指摘や、「富と徳」論争に言及して、政治と経済の関連という問題群をめぐる、より広い思想史的文脈・系譜のなかに本書を位置づけた。そのうえでさらに安武は、専制概念の転換（さらに、政治的専制と一元的世論観との理論的親和性）という視座や、経済活動の自由化に賛成する言説と自由化に抗した言説のいずれをも包摂する視座の重要性を指摘した。

本書の著者である安藤裕介は、以上のような、3名からの多岐にわたる指摘をふまえて、以下の応答をおこなった。(1)スコットランド啓蒙と対比した場合に、18世紀フランスで「議論の位相」が異なっているのは、「奢侈」ではなく「穀物」をめぐる論争であったという事情が大きい。穀物はあらゆる人々の生活に直結する物資であるがゆえに、(王権と中間団体との関係など)統治のあり方を問う議論にもなったし、「世論」との関係がフォーカスされることにもなった。(2)「世論」については、非常に使い勝手がよい概念であったことと同時に、この概念を使わざるをえない時代状況であったという点にも注目することが重要である。たしかに思想家ごとに「世論」の理解は多様であったが、しかし、本書が取り上げた思想家たちの間における1つの大きな対立軸は、「世論」が最終的に合理的なサイエンスの知見と調和しうるのか否か、であったという点に特徴がある。(3)政治共同体内部の集団・階層の関係をめぐるフィジオクラットの思想は、非常にエリート主義的な側面が強く、「人民のための、人民によるのではない政治」を論じた、革命期の「イデオログ」たちに影響を及ぼしたと評価できる。諸集団・階層について論じるなかでは、地主をめぐるのは、土地の生産性という観点からの位置づけがなされていた。知的階層をめぐるケネーは、科挙にもとづく中国の統治体制を高く評価していた。(4)本書で分析した思想家たちの宗教論は多様である。なかにはケネーのように、宗教的多元主義の観点を探る思想家も存在した。(5)本書をより広い思想史的文脈のなかに位置づけてみた場合に指摘しうるのは、富の問題が軍隊・軍事力の問題と連動していた、という点である。とくにケネーは、国家の戦争遂行能力と土地の富を基盤とした財政構造について興味深い議論を展開している。この点については本書では扱うことができなかつたので、今後の検討事項である。

(4) 討論

そのうえでフロアからは、(1)たとえば『百科全書』がいわば民間のプロジェクトであり、経済的競争のなかで出版がなされていた、という歴史的事情をふまえながら、世論、公共圏、経済の関係について検討することも重要である、(2)「世論」については、たとえば後期デイドロに見られる「一般意志」理解との関連を問うこともひとつの補助線となる、(3)政治共同体における経済や宗教の役割・位置づけをめぐる理解・思想を分析するうえでは、「経済的人間」「宗教的人間」「政治的人間」というかたちで、人間やそのエートス・行動規範の類型(さらにはそれらの関係)を問う視点も重要である、等の論点やコメントが提起された。

本セッションは、安藤の好著を共通題材にして、18世紀フランス思想をめぐる最新の研究状況をつたえるとともに、今後の展望を予測させるセッションとなった。それは、報告・応答・問題提起のみならず、セッションに参加いただいたすべての参加者の協働による成果である。

(文中敬称略、文責世話人)